

毎日が、散歩の途中

名を呼ぶ

文と絵 岡本杏子



杏

この夏、郊外の川で私は水の中眼鏡とシノーケルをつけ、が3人、浮き輪につかまって淵でぶかぶか浮きながら魚を見ていた。ヤマメ、鮎、ハヤが50匹はいたろうか。よく来ている川だが、こんな大群に会ったのは久しぶりだ。夏の終わりでヤマメも鮎もむちと肥っていた。手でつかめそうだが、身のこなしの早い魚たち、そうはいかない。魚の一群は岩陰にとどまりながら大きく口を開けて上流から流れてくる虫を待ち構えている。苔を好む鮎は、少し離れたところ、別の一群が時々身をひるがえして岩肌を歯をぶつけ、苔を食べている。苔に覆われた岩に近づいてよく見ると、ところどころに鮎が削り取った跡がはつきり残って面白い。私が岩に近付くと鮎はパッと散り、離れるとまた苔に群がる。何度も繰り返して、鮎と遊んだ。ふいに足が何かに触れたので驚いて水底に足を着くと、

だが、どうも気に入らない。あれから何日も経つが、いまだ釈然とせず、時々思い出し怒りをしている。私に近づいた。私は「名」を粗末にする、ことにひっかかるのだ。名を呼ぶと対象との距離はぐっと縮まる。花の名、野菜の名、動物の名。私にも知らない名は星の数ほどあるが、小さな花でもなるべくその名を覚え、声に出してみたいと思う。急に話が飛ぶようだが、飼っている犬や猫を、旅行に行くから病気だからと保健所に持ち込む人が増えて社会問題になっている。ポチやシロと名付けてもおお、そんなむごいことができるのかと暗澹たる気持ちになったのが、そもそも私が「名」にひっかかる始まりであった。

岡本杏子(あかもと きょうこ)
神奈川県生まれ、世田谷区在住のライター。
店舗・住宅・人物の取材執筆を得意とする。
今までは経験し職は美容師や専業主婦、
モデル、ライター、正社員を含め20を超える
が、ライター業に落ちつき、は15年。散歩
と読書が主な趣味。一女の母。

特別寄稿

世界の改札

朝日新聞社 牧野愛博

先月、韓国外交官の知人を送別した。2年前の夏に東京にやって来た彼は今回、ニューヨークの国連代表部に勤務するという。

「2年前はソウルで送別して、今度は東京で送別。お別ればかりですね」
私が笑って話すと、彼は「はい、なんと上達した日本語で、今、東京を離れるのは本当に残念です」と語った。

東日本大震災で公私ともに忙しかつたこと、日本の政界の激しい動きに戸惑ったことなどを率直に話してくれた。

もちろん、最近の日韓の争いが話題にならないはずがない。でも、私の韓国の知人のなかで、日韓の争いに心を痛めていない人などいない。彼の日本の友達だってそうだから、自然と違う方向に話題が向いた。

は、「日本は変化を恐れてはいけない」と彼の一言だった。彼が「日本人は皆、変化する必要がある、改革しなければならぬ」と口々に言うが、なかなか実行に移せない。このままでは世界に取り残されますよ」と話した。日本人の私には余り認めたくない話だ。「具体的な話を」と頼むと、彼は「改札口」を一つの例に挙げた。

「世界の先進国のなかで、鉄道改札口がすっかり残っているのは日本くらいですよ」と彼は言う。あれ、そうだったか？確かに5年前に訪れたドイツはそうだった。改札口がない代わりに、抜き打ちの検札で切符を持っていると高額な罰金を取られるというシステムだった。そう言えば、昨秋に出張したスイスのジュネーブもそうだった。韓国もKTX(日本の新幹線)に限って言えば、改札口は数年前に撤廃されたわけ・・・。

各国は、不正乗車率の増加や人件費の削減、自動改札口の開発維持費の削減などを考え合わせ、撤廃した方が効率的という判断をしているみたいだ。

「日本の改札口の自動化の技術は素晴らしい。でも、それだけじゃあ駄目なんです」と彼は言う。「自分たちにとって居心地が良くても、外と比べてみると、まだまだ足りないことがあったりする。経済的な行き詰まりがみえる日本には、色々と思いついた改革が必要だ、と彼は言いたかったのだろう。

この夏休み、家族3人で新幹線に乗った。東京駅の立派な改札口を見ながら、彼の言葉をもう一度思い出した。

町ネタ

東西南北

華麗なる侯爵家の秘宝

10月3日(水)〜12月23日(日)・(祝)
国立新美術館(六本木)
05777-8600(ハローダイヤル)

1. 知られざる「秘宝」、待望の初来日
名門貴族リヒテンシュタイン侯爵家が収集した美術コレクションは、総数約3万点にのぼり、英国王室に次ぐ世界最大級の個人コレクションといわれます。すでに19世紀には公開されていましたが、第二次世界大戦以降は一般の目に触れる機会はごく限られ、ようやく2004年にウィーンの「夏の離宮」で一部が公開されるようになりました。展覧会としては、1985〜86年にニューヨークのメトロポリタン美術館で開催された大規模なコレクション展のほかに、ほとんど例がなく、日本でも四半世紀にわたって美術関係者の間で展覧会実現の努力が重ねられ、このたび、世界が羨む侯爵家の「秘宝」が初めて来日することになりました。

2. 世界屈指のルーベンス・コレクション、一挙集結
侯爵家が所蔵するルーベンス作品は、30点余りを数え、世界有数の質と量を誇ります。本展では、その中から選り抜かれた10点を一挙に公開します。5歳の頃の愛娘を描いた《クララ・セレーナ・ルーベンスの肖像》は、父ルーベンスの愛情を感じさせる傑作。ほかにも、ルーベンス

史上初の試みとして、天井画も展示。総合芸術としてのバロック空間を体感していただけます。

4. ヨーロッパ絵画史を、至宝でたどる名画ギャラリー
侯爵家の珠玉の絵画コレクションから選りすぐられた名画によって、ルーベンスからバロック、新古典主義までの西洋絵画史をたどります。ラファエッロ、クラナッハ、レンブラント、ヴァン・ダイクら巨匠たちの名画のほか、19世紀前半に中欧で流行したピーター・マラー様式の優美な絵画も並びます。

【記念講演会】
「リヒテンシュタイン侯爵家コレクションの歴史と特性」

「自信をばげ顔をしていた子が、わかった時にはパッと顔が輝いて自信のある表情に変わる。その瞬間が本当に嬉しく、やりがいを感じます」と話す島田恵子先生は、「教えるのが好き」といつか持ちで長く個人指導を続けてきた。指導は1対1。子どもの個性や進度に合わせた教材と教師の学びがここにはある。

「パリロック・サロン」を設け、華やかなバロック宮殿の雰囲気を実現します。また、日本の展覧会

10月4日(木)14:00〜15:30 (開場13:30)
講師 ヨハン・クレフト
ナー(リヒテンシュタイン侯爵家美術コレクション・ディレクター)
※逐次通訳付
「バロック美術の殿堂 リヒテンシュタイン宮殿の名画を旅する」
10月13日(日)14:00〜15:30 (開場13:30)
講師 千足伸行(日本側監修者・成城大学名誉教授)
いずれも会場は国立新美術館3階講堂 定員:260名(先着順) 聴講無料ですが、本展観覧券(半券可)の提示が必要です。
※内容や日時は都合により変更になることがあります。予めご了承ください。

島田・個人指導塾

小学4年生〜高校生対象・マンツーマンで自力を伸ばす



「自信をばげ顔をしていた子が、わかった時にはパッと顔が輝いて自信のある表情に変わる。その瞬間が本当に嬉しく、やりがいを感じます」と話す島田恵子先生は、「教えるのが好き」といつか持ちで長く個人指導を続けてきた。指導は1対1。子どもの個性や進度に合わせた教材と教師の学びがここにはある。

●月謝(1回1時間・月4回)
小学生 10,000円(国・算・英)
中学生 12,000円(国・数・英)
高校生 15,000円(英)

●スポット授業(1時間)
中学生 4,000円(国・数・英)
高校生 5,000円(英)

※定期テスト・英検対策など「必要な時だけ」指導、外生も受付

●入会金なし

●授業時間 午前/午後/夕方

●授業料 50,000円

●住所 東京都目黒区 島田・個人指導塾

●電話 03-3481-2510

●ホームページ http://www.nettaura.ne.jp/~nettaura/